# 科学と宗教の「独立」モデルについての検討
## ―事実/価値二分法との関連から―

林　研

（和文要旨）

科学と宗教の関係を「対立」「独立」「対話」「統合」の４モデルで考えるとき、両者が無関係に共存するものと捉える「独立」の立場は、対立を避けるのに有効であり、一定の支持を得ている。しかし、完全な分離は現実に則していないという指摘もあり、この立場を代表する NOMA 説にも様々な批判が寄せられている。また、それぞれが担当する領域としての事実と価値が、倫理学上の伝統に反して実際には分離しえない絡み合ったものだという哲学的議論もある。つまり、科学と宗教も、事実と価値も、便宜上区分して扱うことは必要だが、絶対的な分離は不可能であることが様々に示されてきているのである。「独立」モデルは完全な分離というところに意義があり、少しでも重なり合うならば「対話」モデルになる。完全な分離が不可能ならば、「独立」モデルはいずれ「対話」モデルに包摂される運命にある。「独立」は暫定的な立場と捉え直し、適切な対話のあり方を模索していく必要がある。

（SUMMARY）

When considering the relationship between science and religion in terms of the four models of "conflict," "independence," "dialogue," and "integration," the "independence" position, which sees the two as coexisting separately, is effective in avoiding conflict and has received a certain amount of support. However, some point out that complete separation is not actually possible, and the NOMA theory, which represents this position, has received various criticisms. There are also philosophical arguments that facts and values, as the realms of which each takes charge, are

in fact inseparable and intertwined, contrary to the tradition in ethics. In other words, it has been variously shown that while science and religion, as well as fact and value, must be treated separately for the sake of convenience, absolute separation is impossible. The "independent" model is significant in its complete separation; if there is any overlap at all, it becomes a "dialogue" model. If complete separation is not possible, the "independent" model is destined to be subsumed into the "dialogue" model. It is necessary to reconsider "independence" as a temporary position and to seek an appropriate form of dialogue.

## １．序

科学と宗教は一般に「対立」する知的体系だと見られることが多いものの、20 世紀以降、知識人の間では「独立」や「分離」と言われる見方が主流となっている。この立場は科学と宗教を無関係な別個の知的領域であって互いに干渉しないものとみなすため、対立は生じない。またこの考え方は一般の人にも説明すれば通じやすく、宗教の許容に効果的でもある。

しかし、これが最終解決とは言えないという指摘も少なくない。例えば、「独立」モデルは、科学の持ち分を「事実」の領域、宗教の持ち分を「価値」や「意味」の領域として区別するが、これらは本当に二分できるものなのか、という問題がある。日常生活のなかで事実と価値を明確に区別していることはありそうにない。また哲学においても、現代アメリカの代表的な思考法のひとつであるプラグマティズムでは事実と価値の峻別を不可能と考える。

本稿では、科学と宗教の「独立」モデルの特性と限界について改めて確認するとともに、「事実/価値二分法」に関する哲学的議論からこのモデルを検証する。そして、抽出した問題点を克服する方法を模索していく。

## ２．「宗教と科学」関係の類型と「独立」モデル

科学と宗教がどのような関係にあるものなのか、またはどのような関係を取りうるのか、ということに関しては、これまでに様々な類型論が提示されてきている。その中で、科学と宗教を別個のものとして切り離す態度は「独立」「分離」「不干渉」など、様々な表現を用いられはするものの、ひとつの類型としてある程度認知されている。本稿では

イアン・G・バーバーの唱えた四類型[1]を基盤にするため、これを「独立」の語で呼ぶ。

バーバーが提唱した分類法は決して万能ではないが、状況を整理するのに利便性が高く、広く言及されている。 その四類型は簡単にまとめると以下のようになる[2]。①「対立」（conflict）：両者がはっきり矛盾し、共存しえないと見る立場、②「独立」（independence）：両者が異なる領域に関係するため、無関係に共存しうると見る立場、③「対話」（dialogue）：両者の共通点に注目し、そこに建設的関係があると見る立場、④「統合」（integration）：両者の理論を再構成し、一つの体系として解釈できると見る立場。このうち、「対立」は唯物論者と聖書直解主義者という、いわば両端の人たちのみが立つ立場だとされ[3]、逆に言えばそれ以外の人々は科学と宗教を対立的なものとみなす必要がないのである。

本稿ではこのうち「独立」の立場に注目するわけだが、バーバーはこれを、「科学と宗教とは、異なる生活領域、あるいは異なる実在性の側面に関係するので、対立があるはずがない」[4]、あるいは「両者は、自らが問う問題、言及する領域、および使用する方法に従って、区別することができる」[5]といった表現で説明している。

現在、多くの科学者や神学者がこの立場を選択しているが、実際、この見解は明確な長所を持つ。まず何より、効果的に意見の対立を回避できる。両者を同じ土俵に乗せないことによって、先の引用にも見るように「対立があるはずがない」状況が生まれるのである。地動説と天動説にせよ、進化論と創造論にせよ、一見正面からぶつかる主張に見えても、実は「同じ話題を語っていない」ことになり、衝突が避けられてが共存が可能になる。

したがって、この立場は科学の側にも宗教の側にも容易に受け入れ可能である。そこで次に、それぞれの側から見た「独立」論を確認してみたい。

---

[1] Ian G. Barbour, *When Science Meets Religion*, SPCK Publishing, 2000. イアン・G・バーバー『科学が宗教と出会うとき－四つのモデル』藤井清久訳、教文館、2004 年。引用は邦訳書による。

[2] この類型は科学と宗教との関係をどう捉えるかという認知的なレベルでの立場であり、人々の信念やふるまいを分類したものではない。もちろん「対立」の立場をとる人々が実際に対立的な態度をとったり、「対話」の立場をとる人々が実際に対話を行ったりすることはあるが、その次元は分類の根拠とは異なることに注意されたい。

[3] バーバー、30 頁。

[4] 同書、19 頁。

[5] 同書、39 頁。

## ３．科学側および宗教側の主張

科学の側からこの「独立」を主張する代表的な議論は、進化生物学者スティーブン・ジェイ・グールドが提唱した「NOMA（non-overlapping magisteria）：重複しない教導権」という原理である[6]。「教導権（マジステリウム）」は「教えの権限の範囲」を意味し、その範囲がまったく重なっていない、というのである。これは争いを避けるための単なる方便のように見えるかもしれないが、そうではないことをグールドは強調している。

> NOMA とは、道徳的および知的な基盤をもつ原理的な立場であって、たんなる外交的な解決策ではない[7]

グールドによれば科学と宗教は同等に重要であり、しかしまったく別の領域で機能している。そしてそれぞれの担当領域については、次のように示されている。

> 科学のマジステリウムがカバーするのは経験的な領域である――たとえば、宇宙はどのようなものからできていて（事実）、なぜこのようになっているのか（理論）。これに対して、宗教のマジステリウムは、究極的な意味と道徳的な価値の問題の上に広がっている[8]。

ただし、科学と宗教は離れて存在するわけではなく、隣接しているとされる。グールドは両者を水と油に喩えつつ、「しかし、この水と油の層をよく考えてみれば、マジステリウムのあいだの接触は、その接触面のどの一平方マイクロメートルをとっても、これ以上ないほど密接で強いものである」[9]と述べている。両者はぴったり境を接しながら、決して混じり合うことはなく、厳格に切り分けられるのである。

次に宗教側、具体的にはキリスト教神学における動向を見てみよう。現代の学問的なキリスト教神学研究では、科学と宗教の原理的相違を認め、相互不干渉の態度をとる立

---

[6] Stephen Jay Gould, *Rock of Ages: Science and Religion in the Fullness of Life*, Ballantine Books, 1999. スティーヴン・ジェイ・グールド『神と科学は共存できるか？』狩野秀之・古谷圭一・ 新妻昭夫 訳、日経 BP 社、2007 年、13 頁。引用は邦訳書による。
[7] 同書、16 頁。
[8] 同書、12 頁。
[9] 同書、73 頁。

場が主流である[10]。事実と価値あるいは意味との次元を区別する立場は、ニュアンスの相違はあれど、カール・バルト、パウル・ティリッヒ、ルドルフ・ブルトマンなど 20 世紀以降の代表的な神学者に共通しており、「現代神学では意味と事実の区別、それらの次元の分離によって、宗教と科学の対立という図式の克服が試みられている」[11]と言える。

ここではバルトの「新正統主義」の例を見てみたい。バルトは自然神学を否定し、啓示にのみ依拠する姿勢を取るため、一見科学と相性が悪いように見える。しかし実際には科学が否定されているわけではない。単に自然の理解と神の理解がまったく別のことであるという意味なのである。新正統主義によれば、宗教的信仰は科学のような人間の発見にではなく、神の主導権に完全に依存する。科学の方法と課題は神学と全く異なっており、科学は人間の観察と理性に基づき、神学は神の啓示に基づくのである[12]。

## ４．「独立」モデルの問題点

このように、「独立」モデルは科学側からも宗教側からも受け入れやすい特性を持っており、基本的に有効であって実践的なレベルでは問題はない。しかし、人間生活に深く浸透する二つの営為を完全に切りはなすことに不自然はないだろうか。一般に、ものごとを隔離して安心を得ることは、不安定さを残す。それは例外的な事態に適切な対応がしづらくなるだけでなく、一種の思考停止をもたらし、両者のありうべきよりよい関係への道を閉ざしてしまうことにもなりかねないのである。

科学と宗教の「独立」モデルについてバーバーは、現実の人間経験と合致していない点を指摘している。

> きちんと別々な区画に分かれたものとして、我々は生活を体験しない。生活の異なった側面を研究するために、特定の学問を発展させる以前に、我々は全体性と相関性のなかで、それを体験する[13]。

「独立」モデルへの学問的批判としては、グールドの NOMA に対する分析研究に数

---

10 芦名定道『宗教学のエッセンス―宗教・呪術・科学』、北樹出版、1993 年、191 頁。
11 同書、192-3 頁。
12 バーバー、40-41 頁。
13 同書、47 頁。

多くの指摘がある。例えば、マッシモ・ピグリウッチは、NOMA が失敗している点として以下の三点を挙げている[14]。

①NOMA は、大半の人々が「神」として考えるものに適用されるものではなく、理神論者が心地よく感じるような極めて特殊な神の概念に適用されるものである。それゆえ、NOMA はグールドの主張に反して、われわれの社会で信仰者と世俗主義者の間にある現在の分断を癒すことができない。

②自然主義的誤謬には異議を唱えることができる。ひとつには、われわれは「何であるか」を「何であるべきか」の少なくとも大雑把なガイドとして用いるべきではないだろうか。せめてわれわれはこれを未解決の問題として扱うべきである。また、科学は確かに「何であるか」の結果についてわれわれに教えてくれるため、われわれは、自身のさらなる幸福のために何をすべきかをより良く決定することができる。

③道徳が宗教だけの領域であるというのは正しくない。なぜなら倫理哲学もまた、われわれの行動を議論する合理的な方法を提供し、その社会的影響をもたらしてきたからである。

①を少し言い換えると、NOMA は自然界に一切介入しない神を前提とする必要があるが、伝統的なキリスト教はむしろ自然界に介入する人格的な神を信仰してきたということである[15]。③は、グールドらの論者がしばしば宗教の担当分野を「道徳的価値」として規定することによる問題点と言えるだろう。

そして、本稿がこの後取り上げる問題点はこの②に相当する。これは事実と価値あるいは意味とがそもそも二分できるのかという問題に直結する。例えば芦名定道の次のような指摘がある。

> 事実に基づかない意味などたとえ主観的意味であったとしても成り立ち得ないし、意味から分離された事実など人間の関心の対象とは成り得ない[16]。

芦名は事実と意味の区別が科学と宗教の無用な対立を避ける効用を評価しつつ、しかし事実と意味が結合して絡み合うところに人間固有の問題が存在すると指摘する。現代

---

[14] Massimo Pigliucci, “Personal Gods, Deism, & the Limits of Skepticism,” *Skeptic, Vol.8, No.2*, 2000, pp.41-42.
[15] Joshua M. Moritz, “Rendering unto Science and God: Is NOMA Enough?,” *Theology and Science, Vol.7, No.4*, 2009, p.366.
[16] 芦名定道『自然神学再考－近代世界とキリスト教』、晃洋書房、2007 年、209 頁。

の人類が直面する生態論的な危機や生命倫理の諸問題は、意味と事実の分離を越えている、というのである[17]。

ここで、「価値」と「意味」の表現について補足しておきたい。これは「科学と宗教」の問題に「事実と価値」の議論を重ねるこれからの議論についての確認である。一般に、宗教は人生や生活に意味づけをする機能を持つと言われるため、科学に対する宗教の担当領域としては「価値」よりも「意味」が挙げられるのが通常であろう。「価値」という語はむしろ倫理学の文脈で用いられがちである。そして「意味」と「価値」が厳密には別の概念であることを考えれば、「科学と宗教」と「事実と価値」は重ならないようにも見えるのである。にもかかわらず、これを重ねて論じてもよいと考える理由は以下の二点である。

第一に、特に注釈なく「科学と宗教」についての議論に「事実と価値」の話題を持ち込むことは珍しくないということがある[18]。第二に、語義の面から、「意味」は「価値」を含んでより広いニュアンスを持つ。「意味」には①言葉が示す内容、②表現・行為によって示される、もしくは暗示される内容、③価値・重要性、という語義があるが、宗教が「意味」を明らかにするという場合は②と③が該当するだろう。「価値」についての議論は少なくとも「意味」についての部分を占めると言え、またいずれも経験的に直接観察され得ない領域についての一表現であることから、科学と対比して宗教に当てはめることに決定的な誤りはないと考える[19]。

そこで、科学と宗教の峻別を検討するにあたり、その土台となりうる事実と価値の二分法について、以下に検討していく。

## ５．事実/価値二分法について

事実/価値二分法という考え方の直接の源流は、いわゆる「ヒュームの法則」だと言われる。ヒュームは「～である（is）」（存在）から「～すべき（ought）」（当為）は導き出せない」ということを指摘し、倫理の問題が事実認識から原理的に分離されると主張し

---

17 芦名、『宗教学のエッセンス―宗教・呪術・科学』、194 頁。

18 本稿で引用した文献でも Pigliucci（2000）、Moritz（2009）、Barzaghi and Corcó（2016）がこうした記述を行っている。

19 「事実と価値」関係を「科学と宗教」関係に重ねてもよいと思われる理由はもうひとつある。原文を見つけることができなかったが、複数の先行研究が「グールドが NOMA を主張する際に「存在から当為を導き出せない」ことを引き合いに出していると述べている（Pigliucci（2000）、Barzaghi and Corcó（2016）など）。だとすれば、NOMA の原理を「事実と価値」問題と重ねることは正当であろう。

た。

事実と価値との分離が特に明示的に示されるようになったのは19世紀末～20世紀初頭のことである。目立った動きとしてまず、新カント派の法哲学において存在と当為、存在認識と価値認識を峻別する「方法二元論（methodendualismus」」が打ち出された。また、ほぼ時を同じくして、英国の倫理学では、G・E・ムーアが「自然主義的誤謬（naturalistic fallacy）」を主張する。これは善が自然的性質に還元できないこと、ひいては事実命題から価値命題を導出する推論が論理的誤謬であることを主張するものである。

こうした見解は、原則論として考えるには納得しやすく、経験的事実を重視する方法である科学が台頭する時代にも重なり、標準的な知的態度として広く受け入れられるようになった。

一方で、そうした潮流と同時代にありながらむしろ事実と価値を不可分なものとして捉えた哲学がプラグマティズムである。プラグマティズムは主に真理論として認知されているが、ここで真理は人間に要求されて生じるものとみなされる。真理は人間の行動にとって有用な道具なのであって、価値と無縁な真理というものは想定されない。プラグマティズムは経験的に真理を知るという点で科学の立場と同調するが、そもそも経験が不可避的に価値観を伴うことを指摘するのである。したがってプラグマティズムによれば、価値認識が事実認識のなかに浸透することは避けられない。こうした根拠により、事実/価値二分法は否定されるのである。

近年、プラグマティズムの立場から事実/価値二分法を分析・批判した代表的な論者はヒラリー・パトナムである。パトナムは分析哲学の中心人物として活躍した哲学者だが、1980 年代以降はプラグマティズムに傾倒し、ジェイムズやデューイの思想に接近した。パトナムはプラグマティズムが根本的に「事実と価値の絡み合い」を前提とすることを強調し、さらに自身の分析として事実と価値の「絡み合い」の例を挙げていく。例えば「残酷な」という語についてである。

この点について少し改変しつつ要約すると次のようになる。「残酷な」には明らかに規範的・倫理的な用法があり、人を「残酷な」と言うとき、そこには批判が込められている。実際、「彼は残酷であり、また、よい人です」という言明は普通成立しない。その一方で、「残酷な」は純粋に記述的に用いることも可能で、歴史家が「この君主は残酷であったため多くの反乱が起こった」と言うとき、そこに倫理的判断の意図はない。

つまり、「残酷な」という語は想定される事実/価値二分法に収まっていないのである[20]。

ところで、一般に科学的知識は価値を伴わないものと考えられており、だからこそ「科学と宗教」と「事実と価値」が重ね合わされるわけだが、パトナムは科学についても価値を含むものとみなす。

> 「首尾一貫性」、「尤もらしさ」、「理に適っていること」、 「単純さ」の判断や、ディラックがそう呼んだことで有名な、仮説の「美しさ」の判断は、すべてチャールズ・パースの意味での価値判断…である[21]。

> 認識的価値（首尾一貫性、単純さ、その他）も価値であり、客観性という点に関して倫理的価値と同じ舟に乗っている[22]。

ここに「宗教」は関係していないものの、少なくとも「科学が事実のみを扱い、価値は扱わない」という見解は否定されている。

さて、ここまで検討してきたように、事実と価値を峻別するのは様々な意味で現実に即していない。しかし、現代のわれわれはこの区分を自然なものと感じ、その結果科学と宗教の「独立」論にも納得しやすい。つまり、厳格な二分法が成立しないとしても、区分することには一定の妥当性がある。

事実と価値または宗教と科学を峻別する態度の興味深い点として、論理的な原理として提示されていると同時に意図・目的が認められる点がある。特に科学と宗教の「独立」は、対立の解消とそれぞれの領域の充実という意図が明確に含まれる。

この点からすれば、厳格な二分が不可能であるとはいえ、区分すること自体は望ましいように見える。しかし問題は、この区分では暗黙のうちに両者の間に非対称な価値づけが行われていることである。例えば、新カント派との繋がりをもつマックス・ヴェーバーは「価値自由」の概念を提示したが、これは事実研究が価値から自由であるための試みであり、事実認識から価値を取り除くことが望ましいという文脈に則る。結局、近現代の一般論として、知識として要求されるのは圧倒的に「事実」「科学」であって、

---

[20] Hilary Putnam, *The Collapse of the Fact/Value Dichotomy and Other Essays*, Harvard University Press, 2002.ヒラリー・パトナム『事実/価値二分法の崩壊』藤田晋吾・中村正利訳、法政大学出版局、2006 年、39-40 頁。引用は邦訳書による。
[21] 同書、170 頁。
[22] 同書、4 頁。

「価値」「宗教」は格下とみなされているのである。パトナムは次のように指摘している。

> 私が問題にするつもりの思想家たちは、「事実言明」は「客観的に真」 であることが可能で、「客観的に保証」されることも可能である、と主張する。ところが価値判断の方は、これらの思想家たちによれば、客観的に真であること、客観的に保証されることが不可能なのである[23]。

これが科学と宗教の関係になると、宗教の公共性が著しく無視されることにつながる。事実と価値の場合、道徳的価値についてはそれでも法などの形で公共的な真理性が認められるが、科学と宗教の分離は、しばしば客観と主観、合理的と非合理的、公的と私的などのニュアンスに引き付けられ、宗教は貶められていく。

では、宗教側からも「独立」モデルへの賛意が強いのはなぜか。これは現代における圧倒的な力関係の差によるものであろう。現代社会では、科学と宗教を並べてみた場合、圧倒的に科学側が有利であることは言うまでもない。科学はテクノロジーと結びついて目に見える恩恵を大いにもたらしているからである。

一方、宗教がもたらす価値は目に見えるものではない。仮にこれを公共空間から排除したとしても、直接的な弊害が目に留まることはないだろう。この力関係のなかでは、宗教が全面的に捨て去られる可能性も考えなければならず、そういった状況下で「独立」モデルを支持することは、宗教に一定の力を確保するのに役立つ。つまり、宗教の領域を消滅から守るために「区分」を強調する必要が生じるのである。さらにその領域が侵食されないためには、境界を堅くしておかなければならない。

## ６．「独立」から「対話」へ

バーバーの分類した四モデルのうち、「対立」は両者が共存できないとするもの、「統合」は両者をひとつのものと理解することである。そういう意味で「独立」と「対話」は、異なる立場ではあるものの、区分を前提としつつ共存が可能だと見る点で共通性を持っている。「独立」と「対話」の決定的な相違は、境界が徹底しているかどうかである。つまり、「non-overlapping」と言われるように、「独立」の固有性は区分の絶対性に

---

[23] 同書、1 頁。

ある。「無関係」と見なす完全な断絶があってこその「独立」であり、少しでも相互に行き来があるなら「対話」になるだろう。

しかし、先に検討したように事実と価値の完全な分離は不可能である。担当分野が完全に区分できないなら、科学と宗教も完全に分離はできないと見るのが妥当であろう。つまり、厳密な意味での「独立」は理念的には通用しても、現実的ではないのである。

先ほど確認したように、少なくとも宗教側が「独立」を主張するのは、科学との非対称性から身を守る目的があると考えられる。したがって、科学と宗教の非対称性が克服されれば、独立から対話への移行がスムーズになる。そのためには価値の実在性について議論が進み、事実と対等の合理性を持つことが必要であろう。これはメタ倫理学の分野で研究されるところのものであり、この分野との連携が宗教にとって有益だと言えよう。

ところで、NOMA を主張したグールドが、その実「対話」モデルに踏み込んでいるという指摘がある。グールドは、科学と宗教がそれぞれの領域を侵犯しないことを強く主張しながら、同時に「対話」を試みるべきだと述べている[24]。さらにグールドは、科学と宗教それぞれが獲得した知識は、人間の個人的な生に統合されるべきだとも言っている[25]。つまり、グールドは両者を分離独立させたうえで、対話へ向かうという立場になる。しかし、ここでも「重ならない」ことが前提であるから、これは四モデルにおける「対話」とは異なる。そしてここまで見てきたように両者の峻別が不可能であるならば、このヴィジョンは通用しない。

カトリックの信仰を持つ生物学者として科学と宗教の問題を研究するフランシスコ・アヤラは、基本的に「独立」の立場を取っている。しかし、アヤラは進化論の見地から人間の道徳的利他主義を自然的に理解していける可能性を想定しており、暗黙のうちに NOMA の枠を超えているという指摘がある[26]。アヤラが科学と神学の積極的な関わりへ向かっているのなら、それは区分を前提としつつ「独立」を出て「対話」モデルに踏み入っていると見ることができる。

最後に、「独立」をベースとしながら「対話」へ向かうためのひとつのヒントとして、ウィリアム・ジェイムズの例を見てみたい。バーバーは「道具主義」を「独立」モデル

---

[24] Amerigo Barzaghi and Josep Corcó, “Stephen Jay Gould and Karl Popper on Science and Religion, *Scientia et Fides, Vol.4, No.2*, 2016, p.432, および、グールド、233 頁。
[25] グールド、65-66 頁。
[26] Moritz, p.367, p.372.

に分類しているが、ジェイムズは真理を道具と捉えつつも「独立」を超えている。

ジェイムズは『宗教的経験の諸相』冒頭で、構造・起源・歴史などを問う「存在判断」と、価値・意味・意義などを問う「精神的判断」を区別することを提唱する。これはまさに事実と価値を区分することの呼びかけである。この部分での話題は、宗教の起源と想定できる宗教的経験を「神経疾患の結果にすぎない」と見る「医学的唯物論」に反駁することであった。つまり、仮に神との出会いが神経疾患の病態であったとしても、その出会いがもたらした宗教の価値はいくぶんも損なわれない、という主張である。これは前節で見た、宗教の防御のための議論の典型例と言える。

しかし、この区分の態度は『諸相』全体を貫いてはおらず、後半になるほどこの区分が作用していないということはよく指摘されている。そして科学と宗教について、ジェイムズは基本的に両者が同じ構造を持つ営みだと解している[27]。原理的に方法論を共有すると見なされているかぎり、これは明らかに「対話」のモデルに属する。

つまり、ジェイムズは事実と価値、科学と宗教を区分しながら、二分法ではなく相互に通じ合うものとして理解しているのである。これを論理的に中途半端と見るか、バランスの取れた態度と見るかは一概には決定できない。しかし、少なくとも区分することと、対話の態度を取ることとの両立に挑戦し、一定の成果を得ているとは言えるだろう。

厳密には成立しえない「独立」モデルの未来への態度は、「独立」をふまえつつ「対話」へ移行していくしかないと思われる。科学と宗教の両者を尊重する態度としての区分と、重なり合う要素の探究としての対話の両立こそが、困難ではあるものの、論理的かつ実践的に目指されるべき次のステップと言えるだろう。

## ７．結

科学と宗教が「独立」していると見る立場は大きなメリットを持つものの、その独立・分離が完全なものであるという主張は成立しえない。それぞれの担当する事実と価値の二分法が厳密には無理があることからも、科学と宗教の相互浸透は認めなければならないからである。

バーバーが示した四類型が示される「対立」～「統合」の順序は、より理想的な方へ進んでいくニュアンスを持っているが、これを時系列的に捉えることも可能だろう。19 世紀の「対立」中心の世界から、20 世紀の「独立」中心の世界、そして今後は「対話」

[27] このテーマについては拙著『救済のプラグマティズム－ジェイムズの「宗教と科学」論』、春秋社、2021 年、で詳述した。

中心の世界が望まれるのである。

キーワード

科学と宗教、「独立」、事実と価値、プラグマティズム、「対話」

Keywords

science and religion, “independence”, fact and value, pragmatism, “dialogue”